



未来へ続く虹色の架け橋を渡ろう！

山梨県立韮崎高等学校 サッカー部



「伝統校・韮崎高校のサッカー部が山梨県高校総体で優勝！」の報せが轟いてまもない中、「おめでとうございます！」と訪ねると、監督も選手ももう気持ちは次に向かっていった。昨年、就任初年度にしてチームをインターハイ予選大会優勝にも導いた今村優貴監督。勝機をつかむために何より大切なのは選手の主体性。サッカーだけでなく、生活、勉強ともに「ハードワークを厭わず励む」。その指導理念、教育のペースを伺った。(文・佐々木 知勢子)

「競争しないまま卒業して、いきなり社会にでて激しい競争をさせられたら、誰だって病んでしまいます。今のうちから競争の大切さ、おもしろさも伝えておかないと!!」

サッカー『を』ではなく サッカー『で』学びなさい

5月9日の山梨県高校総体で優勝した韮崎高校サッカー部を翌週訪れた。昨年監督に就任した今村優貴監督は、初年度にインターハイ県大会優勝、さらに今回の高校総体関東大会進出と続けざまに快挙を成し遂げ、都度「伝統校・山梨制覇！」の文字が踊った。

「インターハイの予選突破は7年ぶり、関東大会の予選を兼ねた大会の優勝は9年ぶり。もちろん嬉しいですが、選手たちには普段と同じように『やらなきゃいけないこと』をちゃんとやるように言っています」と今村監督は少しも浮き足立っていない。5月9日の決勝が終わった後もすでにリーグ戦を行っており、一つの試合に出場した選手もできなかった選手も、すぐにまた新しい試合へのモチベーションを高めるために気持ちを切り替える必要があるのだ。

サッカー部員は現在91名。監督はそれぞれの選手の競争力を引き出す一方で、学校生活、勉強もおろそかにせず、サッカー同様に全力で取り組むよう指導に当たっている。「サッカー『を』ではなく、サッカー『で』学びなさい」と日々伝えます。対面すると思わず背筋をぴんと伸ばしたくなるようなキリッとした笑顔で、話してくれた。

ペースは教育力

自身も韮崎高校サッカー部出身の今村監督は、県外の大学から大学院へと進み、26歳になった時、自分の進路について考えたという。

「このままサッカーオンリーの道を進むか」。ずっと続けてきたサッカーの勉強をいろんなことに活かしてみたい。サッカーだけを教えたって自分の場合はきつとつまんない。自ずと教員への道が開けていった。「生徒たちの進路相談を受ける時も話しますが、何事も選



2014 Nirasaki Highs



「決断はシンプルに！」が基本で、選手の主体性を促します。



「お父さん、お母さんは、3つも4つも同時にいろんな役目を果たしているだろう。大人はみんなそうやっていろんなことを掛け持ちするものなんだ。だから、高校生がサッカーだけやってればいいっていうもんじゃないんだぞ」と生徒たちに話をします。

扱はシンプルにすればいいんです。地元でやりたいのか外でやりたいのか。『公』と『私』のどちらを選ぶのか。そうやって一つ一つ答えをクリアに出していくようアドバイスしますね」。

今村監督は、監督であると同時に教員であることに徹し、部員たちにも一高校生として築くべき生活の土台づくりに重きを置くよう、説いている。毎週金曜に行なわれる学力小テストも落ちるのは許さない。「やらなきゃいけない時に、やらなきゃいけないことをやれないなら勝てない」。それはグラウンドの中だけではなく、勉強も同じ。

「プロ選手になる者はほんの一握り。まして、私の同期に中田英寿がいますが、彼のようなプレーヤーになるのはほんのひとつみ。でも、誰もが皆卒業してあの門を巣立っていく先には『社会人としての生活』が待っている。ここではその準備をき

ちんとさせたい」。

今村監督は真摯な気持ちを率直にそう話す。

点数ではなく%で上回れ!

試合にしてもテストにしても「点数」がシビアに事を決するが、今村監督は「自分の持ち点よりは%を意識して、%で上回れ!」と部員を叱咤激励するといふ。個々の持ち点は、特に技術など差があるが、自分の力を何%出せるかが大事。そこで競っていきければ自然と持ち点も上がってきます」と、その笑顔がまた頼もしい。

グラウンドで何人かの選手に話を聞くことができたが、「監督はこわいときはこわいけど、普段は優しいです」練習がきついなあつて思うときもありますが、勝った時にみんな喜んでるのがすごく嬉しいですよ」と、こちらも笑顔。厳しさも時に大



「やりたい、やりたくないではなく、やらなければいけないことをやらなければいけないと思って行動できるか。これは勉強もサッカーもまったく一緒」。

変重要であることを他ならぬ選手たちが一番よく分かっているのだ。

「自分があの頃の『葦高時代』に戻れと言われたら、正直戻りたくありません(笑)。上下関係も厳しかったし、練習もやはりきつかったです。でも、あの3年間が今の支えになっているし、『葦高に新たにもう一度入学しますか?』と聞かれたら、迷わず『はい』と答えます」。

今村監督は振り返ってそう話し、「こんなに地域の支えが厚いサッカー環境は全国でも少ないですからね」と母校への思いも語ってくれる。

温かい人になってほしい

伝統校の監督就任にあたって、プレッシャーはないのかと聞かれる場面も多いそうだが「変わり者と思われるかもしれませんが、あまりありませんね」

とさらりと答える今村監督。教員としての指導のベースはぶれない自信があり、その一番根本になっているのは「温かい人になってほしい」という思いだった。

「口ポツトみたいな大人にはなつてほしくないんです。成人するまでの間に、嬉しくて涙する、悔しくて涙する、そんな経験をたくさん積んでもらいたいですね。スマホでラインだ!とコミュニケーションツールは、どんどん便利になってきているが、人と人とのつながりで最も大切なのは「温かさ」。これからはその「温かさ」が何よりも求められる時代になると今村監督は考えている。

今の仕事は本当に楽しい。青春真っただ中の人間とかかわり合いを持てる幸せをしみじみ感じる毎日。生徒の一人は「将来は、サッカーに携わる仕事をしたい」と思っている。指導者やコーチになるのも憧れです」と胸を張って話してくれた。今村監督と共に教員として部員指導にあたっている成島裕明さんをはじめ、県内の教育現場で活躍する葦高サッカー部OBも多い。未来への夢の一つとして「教育者」を選ぶ生徒たちも増えてくることだろう。

5月末に行なわれる関東大会、それに引き続き6月には再びインターハイ予選大会も始まる。「どんな相手に対してもひたむきに自分たちの力を出し続

この人に聞きました。



今村優貴さん (37歳)

サッカーは小学3年生から始めた。増穂サッカー少年団からクラブチームを経て葦崎高校サッカー一部に入部。その後、筑波大学・大学院へと進学してサッカーを学ぶ。外部コーチとして葦崎高校サッカー一部に携わった経験が、いまの教員生活に大きく活かされている。平成23年度、それまでやはり監督を勤めていた富士河口湖高校から葦崎高校に移り、現在に至る。



けることが大切」と言う今村監督。チャンピオンであつてチャレンジャーとしての気持ちを忘れないで戦術を考えるのだ。さあ、私たちも気を引き締めよう!